

イングランドにおける教育の権威主義化

～ アカデミー化、国民的想像力、新自由主義的主体の創出 ～

The authoritarian turn in English education:
academisation, national imaginaries and the making of neoliberal subjects

クリスティ・クルツ

Christy Kulz

訳・仲田康一

Translation by Koichi Nakata

Key words: 新自由主義, アカデミー, イングランド

はじめに

本講演は以下の3点を目的とする。

第1に、イングランドの教育の権威主義化が新自由主義的な価値にどのように結びついており、そのことが学校の組織構造や実践にどのように影響しているかを検討する。第2に、ドリームフィールズ校のような学校において人種、階級、ジェンダーがどのように再生産されているのか、いかにそれらが絡まりあいながら複雑な社会のヒエラルキーを生み出しているのかを解き明かす。第3に、主体を、潜在的には危険な位置に留め続ける幻想と希望の役割を検討する。

本講演はイングランドの中でもインナーシティの状況に即して論じていく。その際、階級や人種の問題が作られている文脈や歴史に着目する。

アカデミーとは何か

〔米国の〕最初のチャーター・スクールは1992年にできたが、イングランドのアカデミーⁱは2000年代に現れたものである。チャーター・スクールとの類似性として、民営化され市場に基づく教育を目指す点が挙げられるが、全く同一というわけではない。アカデミーは、PFIⁱⁱの手法として新労働党によって導入された。それはサッチャー時代に導入されたCTCⁱⁱⁱを引き継ぐものである。

アカデミーは、中央政府によって直接公費が支給され、

地方当局に対してのアカウントビリティから外れる。さらに、独自に給与水準や契約を結ぶことができる等の自由があり、その自由はイノベーションと等値されている。

新労働党の文化的欠損アプローチによれば、貧しいインナーシティの地域には「向上心の欠如」が見られるとされた。彼らは向上心に溢れた文化を創出しようとした。問題は、社会構造ではなく向上心の欠如に帰された。

保守連立政権は、アカデミー政策の修正をした。貧困地域に資源を集中するのではなく、全ての中等学校や、一部の初等学校に対して、アカデミーへの転換を求めた。これは脱集権的地域主義という名で行われたが、逆説的にも、ラディカルな規制緩和と中央集権というべきシステムができたのだ。2010年には、250のアカデミーしかなかったが、2017年には、中等学校の69%がアカデミーまたはフリー・スクールというものである。初等学校でも23%である。その中で、700校以上は、MAT^{iv}という形態である。行政やガバナンスにおける変化は、単なる技術的な変化ではなく、「より大きな社会変革」とボールが呼ぶところのものである(Ba11, 2007: 186-7)。

ゴヴ〔保守党の前教育大臣〕は教育の市場化への反対者を人種間の不平等と結びつけている——本来これらは別の問題であるのだが。ゴヴは自らを革新であるかのごとく論じている。アドニス〔保守党の前教育大臣〕もアカデミーを社会移動のエンジンと論じている。だが、こ

れに対してレイは、これが社会移動と社会正義を結びつけようとする神話的对象であるとしている(Reay, 2013: 664)。

研究調査対象のドリームフィールズ校について

ドリームフィールズ校は、ゴールドポート大都市圏のアーバンデリー地域に位置するインナーシティの学校で、2004年に開校した。40%の生徒は無料の学校給食の受給資格者、80%はエスニックマイノリティである。貧困とエスニシティの多様性は、ドリームフィールズ校の突出したテスト成績とセットで語られる。ドリームフィールズ校の校長であるカルフォード氏の考えは、インナーシティにおけるおびただしい数のアカデミーの青写真となっている。

研究方法について述べる。私はその学校で演劇の教師と学習メンターを兼務していた。それは、政治的にも注目された政策の旗頭と呼ぶべき学校であった。18ヶ月のエスノグラフィーのフィールドワークを行い、保護者・生徒・教師に対して約50件のインタビューを行うとともに、15人の若者のコホートと参与的研究を実施した。成果を上げることが求める学校の理念にプレッシャーを感じており、また、学校が用いていた「規律が自由にする structure liberates」という標語に対して私自身が疑念を抱いたのだった。

学校の理念

ドリームフィールズ校の理念の前提には、人種・階級的な差異に対する病理化された表象というものがある。アーバンデリー地域は、教育上、カオスと考えられていた。「インナーシティのカオス」という言説は、権威主義的で、「ブートキャンプ」的教育方法を正統化するものだった。すなわち、厳しい規律が、「インナーシティの子どもたち」に対応し、学校を安全で安定した場にするための唯一の方法であるという考え方である。前提には、インナーシティの子どもたちは、規律がなく、その家庭は不幸であるという考えがある。問題とされていたのは人種ではなく階級であったが、[結局のところ]人種の差異も階級問題を通して問題とみなされていた。

男性的なヒーローとしてのカルフォード校長は、インナーシティの子どもたちを救うために、軍隊の師団を率いるかのようなようであった。彼は、ラディカルで革命的、帝国の建設者、伝道者・聖カルフォード、孤独な監視員、リスクを恐れない暴動鎮圧者、というようなものとして表象されている。敵に情けをかけない、愛の鞭というの

もその表象の一つだ。

サラ・アームドの『幸福の約束』によれば、不幸な他者が行為の前提となる。そこでは「植民地主義的な考え方によって、他者は、不幸で、幸福な状態であるために求められる性質や態度に欠けているものとして構築される」(Ahmed, 2010: 125)。レッドウッドのネイティヴは、古きも新しきもが主流の価値システムに位置づけられていき、より広い社会構造の問題は無視されるのである。

グローバルな競争に立ち向かう時に権威主義的な教育方法に回帰することは、多文化主義を公然と非難し、教育を通じてより幸福な伝統的文化なるものに回帰しようとする欲望とともに、ポール・ジルロイがいうポストコロニアルな鬱病的状況の「複雑な疾患」の兆候を意味している。ジルロイは、第二次世界大戦時から続く英国のイメージにおいては、非常な神経質さをもって、一緒に暮らしていきやすい国家の文化を感じられる[多文化の]合わせ目となることが模索されたという。彼が私たちに求めるのは、「健全とされる軍隊主義が、問い直されることのないマニ教的世界の[二元論的]道徳的価値と進んで結合し」、それによって「良いことをしたような気持ちに」なるようになったことが、現在における文化の作用にもつながるものとなったことを認識することである(Gilroy, 2004: 95-6)。それは、国内における不平等の拡大を見過ごし、英国が悪魔的な外敵に立ち向かっていたときのことを思い起こさせるものであった。こうした鬱病的状況は、「道徳的・文化的支えを失う以前に場や時を移す」ことを試みるものだった。この「再方向付け」への欲望は、同一性に対する魅力や、ニューカマーに対する敵意と切り離されるものではなかった。なぜなら、回帰への欲望は、「社会的多元主義に対して感じられている危険や、多文化状況からの不可逆性」を拒絶することだったからである(Gilroy, 2004: 97)。

規律の技術

この学校における規律の諸技術は、視覚的な監視・分割・分類・監査のルーティン・統制によって空間・時間・身体を整序していくというものである。

(1) 儀礼とルーティン

整列は、毎日3回実施される。それは、集合的に生徒の身体を規律する主要なルーティンである。整列の合図は8:25の笛である。数百人の生徒がまっすぐ、静かに、アルファベットの列で、学年とグループに沿って整列する。生徒は、帽子、スカーフ、コートを——気温が何度であろうと——脱がないといけない。なぜなら、室内で

は上着を着ることが禁止されているからである。軍隊的なやり方であり、ブートキャンプ、監獄的とも言える。そこではあらゆる空間が視野の内に置かれている。生徒から「ロボコップ」と呼ばれるヴァイン先生は、管理職の一人である。大股で歩く彼は、スポーツ刈りで、細身の黒スーツとサングラスを身に着け、熱心に校庭をパトロールしている。彼の iPad には整列の監督に関する教師の役割分担一覧があり、ある教師が持ち場にはいない場合は、すぐに配置に就くよう求める全員メールが送信される。

怒鳴り声は、廊下で頻りに聞かれた。それは、ヴァイン先生が「恐怖の要素」と呼ぶところのものを注入するものであった。同校には、優れた肺機能で知られた教師が何人かいた。にもかかわらず校長は、影の内閣における教育相が来校する予定があると告げる時、8:30 から 10:00 の間、いかなる怒鳴り声も聞かれないようにしなければならないこと、子どもたちを怒鳴りたい教師がいれば、10 時以降なら自由であると指示した。学習エリアでは大声で叱責しないようにというリマインドメールが、VIP の到着に先立って定期的に送信された。

(2) 場と身体分割

職員室は、ほとんどの学校にあるものだが、それを無くすということは、設計上の決断であった。それは管理職によれば、派閥形成を防ぎ、生産性を高めるための積極的な変化だと説明されている。

分割と注意深い配置は、生徒においてはより厳格に行われている。6 人以上の生徒が集まっていれば、解散させられる。この分断は、問題を起こす生徒集団の配置を防止し、身体「危険な凝塊」を防いでいる (de Certeau, 1988 を参照)。

(3) 常時の視認性・常時の監査

学校の建築はパノプティコン的であり、どこにも隠れられるところはない。

昼食時、ターナー先生は、この建物の監獄様式がいかにも自らに作用してくるかを、鼻をほじる場所もないという皮肉で説明した。最近この学校で働き出したテイラー先生は、勤務初日を思い出しながら、タクシーの運転手がこれが学校なのか刑務所なのか尋ねた——しかも彼女は、それに対して、はっきり答えられなかった！——ことを語ってくれた。彼女が学校に慣れるのには時間がかかった。彼女は、前の学校の同僚に、まるで理科実験をされているような気持ちになったと説明したという。パーク先生は笑いながら同意し、本校は工場のようなと言った。この工場のような機械は、個人を矯正する実験に

とっての理想化された場として機能している。

(4) 囲い込みと切り離し・周縁的空間の統治

地域に対する病理化に基づいて、この学校は地域から自らを切り離そうとしている。

ドリームフィールズ校が、永続的にアーバンデリー地域から切り離されることはありえない。教師も生徒も毎日の終わり、そして休日には家に帰る。フレッチャー先生は、このような限定的な影響力について以下のように嘆いている。

「私たちは、絶えず、子どもたちに、何が正しく何が間違っているかを教え、伝えています。[...] [しかし] 私たちにできることは限られているということです。

[...] 私たちは生徒を年間 195 日しか見ていないのであって、残りは外で友達や保護者と一緒にいるということです。」

スピード感のあるパトロールも行われている。クラーク氏とデュボン氏という屈強な保安要員兼メンターは、冗談交じりに「チキン・ショップ・パトロール chicken shop run」と呼ばれる仕事をしている。それは、学校周辺で、生徒たちがチキン・ショップに行くなどのルール違反をしないようにするための車でのパトロールである。チキン・ショップに対してだけ特別の力点を置くことは、人種的・階級的な含みを持っている。中産階級の生徒が行くような商店は大部分パトロールされていないからである。

(5) 測定と造成：監査による規律

「教師トラッキング」[というシステム]は教師のパフォーマンスをモニターする信頼性のあるツールとして示されている。ヴァイン先生は、所期のパフォーマンスを上げていない教師への支援について語る時、定期的な授業観察が最善の方法であるというが、繰り返し用いる「ステップ・アップ」という言葉は、さらなるプレッシャーと監視を示唆している。ハッチャー先生をはじめ、何人かの教師は、そのシステムの目的とされた有益性について否定的である。

学校はオイルの行き渡った機械になぞらえられる。それは最善のテスト結果を追求するものである。

カルフォード校長は、GCSE [中等教育修了試験] の直前、まな板上に置かれる。テスト結果によって私たちの生死が決まると述べる (Shore and Wright, 2000; Porter, 1995; Dreyfus and Rabinow, 1982; Wright, 2012, Burrows, 2012 を参照)

アカデミー政策は、市場的価値を教育に招き入れ、あらゆる側面に拡張しようとするものである。アカデミー

は、教育の構造が市場原理によって満たされていることを示している。回避性——機能するにはこのやり方しかないという考え方によって想像力は局限されている。

ドリームフィールズ校は、新自由主義における学校の模範とされる。それは、市場のニーズに対応して運営されている。全ての事柄はテスト結果を産出し、生徒を加工するために編成されている。それもまさに「オイルの行き渡ったマシン」であり、A地点からB地点まで生徒を移動させるものである。〔その機能は〕、市民性や参加ではなく、生産と消費という比喻によりよく馴染む。

規律と教育の実践を通じた人種・階級の不平等の再生産

このような規律の手続きは、中立的なものではない。以下、「バッファ・ゾーン」という概念や、処遇の差異に関する説明を行う。「インナーシティの子どもたちを救済する」という理念の他に、どのようなことがなされているのだろうか。

アーバンデリー地域に居住する中産階級の子どもたちは、昔からそこに居住する「ネイティブ」ではない。アーバンデリー地域に居住しているものの、「[郊外の]きれいで、緑豊かな地域」に繋がりを残しつつ、病理化された「土地のイメージ」のある地域に越境してきている。この越境は、教育上の理解や扱いに実際の影響を与えている。ウェインライト先生は、なぜドリームフィールズ校が中産階級の子どもたちを必要としているのか、説明している(Bourdieu, 1992, 2000, 2010; Skeggs, 1997, 2004を参照)。ドリームフィールズ校が教育の市場で生き残ることは、テスト結果を着実に産出することに依拠している。ウェインライト先生は、中産階級の子どもたち——彼らは一貫して白人とみなされている——は価値の高い商品であると述べている。これは、目標志向の文化(target-driven culture)の中で、(白人の)中産階級の生徒は、学校がその目標値に達するのを助けてくれる貴重な存在であるとReayら(2011:148)が述べることに呼応している。ウェインライト先生は、個人を責めるのではなく、より大きな社会構造上の問題を指摘する。すなわち、中産階級の親が有する「システムを動かす」能力〔学校に電話を掛けることや、自らのメディアにおける地位を通して学校に要求を飲ませる能力〕と、同校が中産階級の子どもたちを必要とすることが、ここにおいて合流している。それらの要素はジレンマ的關係にあるが、いずれも中産階級の親や子を自動的に優位に置くものである。ウェインライト先生は、特権を持たない生徒たちを守ろうとし、公平性を維持することは「時には非常に

難しい戦い」であると付け加えながら、道徳的な不確実性を認めている。

ターナー先生のように、黒人の男子に対して怒鳴ることが多いことを指摘する教師もいる。また、ジェンダーの違いも見いだされる。ポスト人種差別主義とされる現代において、人種問題に関する教師教育の不足も指摘される。人種や人種差別に関する教師教育と専門家の研修の欠如は、人種差別主義による生徒の位置付けに挑戦するのではなく、現状を維持し、学校における人種差別の復活を助ける働きをしている。

ニーマル・パワーの『スペース・インベーダー』は、「人種主義的な視力」がマイノリティの身体〔への可視性〕を増幅していると述べる。それは、マイノリティの身体が奇妙であったり未知であったりするからではない。むしろ彼らが脅威であり威圧的だというふうな形で「既知」だからである(Puwar, 2004:51)。黒人の身体は人種として刻印され、監視のもとに置かれる。しかし、矛盾しているようであるが、「人種を意識しないようにする浸透したリベラルのイデオロギーと、専門職の同僚性への必要から、人種〔問題〕は顕現せず、抑圧される」のである(2004:139)。

同一性の創出と平等化のねじれ：頭髪規則を例に

ドリームフィールズ校にはたくさんの頭髪や制服の規則がある。ヘアバンドは黒か赤。女子の髪はこざっぱりしたポニーテール。男子の髪は、剃ってもいけない、襟に届く長さでもいけない。こうした制服や頭髪の規則が何を意味するか論じるために、以下、フィールドワークの一場面を紹介する。

2009年のある夏の日に、私は校庭でフロスト先生にばったり会った。私が前の週に彼女へのインタビューを行った時は、レコーダーが彼女を緊張させたようであった。彼女は笑い声を漏らしそうになると、インタビュー中に3回それを止めるよう私に頼んだ。フロスト先生は、頭髪の規則が公正に適用されておらず、労働者階級の子どもは、中産階級の子どもたちがより多くの自由を認められていると感じていると説明していたが、そのことについて詳述してはいなかった。さて、フロスト先生は休み時間に私の腕を握って、先週言ったことを見せてあげるといった。まず彼女は、無造作なカーリー・ヘアを襟や顔にかかるほど伸ばしている白人の男子生徒を見るよう促した。髪型について〔白人であるがゆえ〕咎められない生徒の典型例だと彼女は言った。次にフロスト先生は、控えめに黒人の女子生徒を示した。その生徒は以前、前

髪のカットについて咎められ、元に戻させられたのだ。さらに、丸いベンチに座っている白人の女子たちを示した。その前髪のカットは顔にかかっていたが、その女の子たちは、切るようには決して言われまいだろうという。

長くて乱れた髪型の背の低い白人男子が歩いて通り過ぎた。私は、彼の髪も乱れていると言った。フロスト先生は皮肉交じりにこう言った。「本当に乱れた髪です。でも、これはだらしのない中流階級の髪です！」彼女は、コーンロウ〔編み上げて作るスタイルでとうもろこしに似ている〕の髪型にしたために「創造的過ぎる」と見なされた男子生徒が LSU〔ラーニング・サポート・ユニットと呼ばれる別室指導用のプレハブ〕に入れられたと説明した。

私の方を向いた彼女は、自分で説明することのできない規則を施行しなければならないことの不快さを説明しながら、彼女が指摘しなかった生徒たちについて話した。彼女はなぜ生徒たちがそれを不公平だと感じているのか理解していた。私が、人種によって線引きがなされているように見えると述べた。彼女は黙ったまま同意してうなずいたし、彼女が生徒を例示するのは人種に即してであったが、フロスト先生は決して「人種」という言葉を使わず、階級について繰り返し言及した。

ディーン先生によれば、髪型は難しい問題であるという。髪型見本の「1番」に示されたような最も短い髪型は、全体的に許可されていない。しかし、黒人生徒にとっては1番の髪型はこざっぱりした髪型であるという。他方、白人生徒が1番のような短い髪型をすると人種差別主義者のような意味合いを持つため、1番は許可されていないのである。

ワトソン先生は、髪型規則に関する生徒の不満に共感しながら、それが黒人のヘアスタイルを無視していると感じていた。彼女は、「本校の規則に違反する中流階級の白人生徒はどこにでもいますが、本当ならもっと捕まっているはずなのに、彼らが捕まることは時々です。そういう不均衡があるのです。とても大きな不均衡です」という。ジョシュアのように、生徒会に加わって髪型規則を変えようとした生徒もいたが、それは結局、意見が取り入れられることのないヘアリングというパフォーマンスで終わった。ドリームフィールズ校は、生徒の声が聞かれるようなメカニズムを形式的には提供するが、実際には生徒が言っていることに耳を傾けないのであった。

自らが普遍的であるという主張に反して、ドリームフィールズ校の実践は、具体的な、特定の形式に基づいて

いる。その普遍性は、白人で、中産階級のモデルに即しており、人種・階級的な傾きを持っていながら、それらの規則が中立であることを偽っている。

エストとゴールドバーグは、文化的クローニングと、同一性の生成の問題性を論じている。制度化された同一性の再生産は、人種・ジェンダー・階級という社会構造に深く染み付いた性質である。生物学的なクローニングは大部分においてフィクションといえるが、特定のタイプの文化のクローニングは毎日実践されている。彼らは、アイデンティティと差異から、社会的不正義と不平等が同一性の再生産の中に明らかに存在していることに着眼点を移すよう求めている (Essed and Goldberg, 2000)。

見せかけのメリトクラシーは、差異を扱うことを阻むものである。教師や生徒は、テスト結果を産出するという重要とされた仕事をしており、素直な生徒は、容易に労働市場に消費されていく。

ドリームフィールズ校において普遍的とされている身体は、白人主義的で、中産階級的な見せかけの中に描かれ、そうしたものとして作り上げられている (Mohanty, 2003 を参照)。

校庭における生徒の分断・生徒による交渉

ここで、生徒に対してなされる異なる処遇について説明する (イングランドの人種や人種化、階級に関する分権としては Alexander, 2000; Archer and Yamashita 2003a, 2003b; Gillies, 2007; Haylett, 2001; Tyler, 2008; Walkerdine, 2003 を参照)。

白人生徒は、「コンパクト」で、ジェスチャーも落ち着いているとされるが、黒人生徒は、大きな声や、感情的な身振りをする事が多く、それゆえ、彼らが何か破壊的なことをしているかどうかにかかわらず規律を引き込むことが多い。これに対して、静かで動きの少ない所作で会話をしている白人生徒は、何を話していたとしても見た目としては脅威でない。一番上のセット〔学力に応じて生徒を分割して授業をする際のひとつひとつの学力グループのこと〕にいる黒人のナイジェリア人であるジョシュアは、動作や声量を変え、規律の眼差しをかわすようにしている。

子どもたちは自らを変化させている。校庭における可動性は社会的・学業的利益につながる。ジョシュアは、グループの間を移動している。異なる社会グループと混ざり合うことは、自らの目を開き、自らをダイナミックで多様なものにするという。サムエルは、自らが「同じグループに居続けるような人間ではない」と述べ、小さ

な穴に閉じこもることの無いようグループの間を行き来していると言っていた。アイザックは、移動することについて、他者への関心とともに、自分が「乗る」こと——すなわち、オックスブリッジに進学する社会集団に入ることへの野望と結びつけていた。彼は、ジョシュアと同様に、「他者と切り離されていようとしていたり、自分と違う人たちを恐れていたたりする」より、異なる集団に入っていたほうが良いと考えている。彼は、こうして交流することは良いことであると考えており、人生において仲良くやっていくことは——必ずしも白人の中産階級の価値を得るためというだけでなく——必要だと考えている。

タメカは、声が大きく大げさだとジョシュアが述べたグループの一人である。休みの時間に校庭を歩いているとき、私は彼女に、生徒たちを分断するような何かはないか尋ねた。タメカは、それは人種であり、差別は長い時間、存続していると述べた。しかし、もしそれを言ったところで誰も何もしてくれないから、それについて論じる意味はないとも言った。教師たちは、一部の子もたちは悪いものだとは決めてくれていると彼女は述べた。私たちは、ディヴォンティーの前を通った。彼女は、タメカと同じグループにいる背の高い黒人の男子生徒で、大きく分厚い黒のジャンパーを着ていた。タメカは彼を指差し、こう言った。「先生は、彼のような子を見て、言うことを聞かないやつだと考えるのよ」。「しかし」私は彼を教えたことがあり、その母親とも目標設定面談で数年前に会ったことがあった。彼は明らかに学校を嫌っていたが、いつでもフレンドリーで、授業を妨害したことはほとんどなかった。廊下を歩きながらタメカは、同学年の白人女子生徒であるブリジットを指さして、彼女も言うことを聞かない生徒だといった。その白人性にもかかわらず、ブリジットは、言うことを聞かないのであり、校庭での白人中産階級のグループには入っていないのだった(Lander, 2015を参照)。ブリジットやディーンたちのような白人生徒は、労働者階級に属していて、汚れた白人性、汚ない白人性を身に着けているとされる。彼らは、ポッピーのような白人中産階級の生徒と異なる見方をされている。

新聞紙上の「チャヴ」〔低所得の労働者階級への蔑称〕に対する冷笑や、カルフォード校長による労働者階級を問題化する語り方というような、貧しい階級に対する嫌悪が形成しているのは、貧困にまみれた公営住宅・あるいはエスニックマイノリティとの性的関係を通じた人種性によって「汚れた」ものとされ、境界を引かれた白人性であると、イモーゲン・タイラーは述べる。立派な

中流階級〔と称する人々〕は、労働者階級の「不潔な白人性」〔という考え方〕を通して、自らの道徳的優越性を主張するのである(Tyler, 2008: 25-6)。誰かを「悪い」生徒であるかどうか評価することは、黒人か白人か、中流階級か労働者階級か、というような単純な二項対立ではなく、極めて多様化した空間の中に広がり維持されている人種的・階級的な合成物として複雑かつ相互的に形成された認識なのである。

他方、白人中産階級は、ジョシュアのような人種的他者によって、多文化資本を得ているといえるだろう(Reay et al, 2011.)。カテゴリー化が、一時的なシフトや異なる作用をするということを示している。このことは、人種の浸潤性や柔軟性を示している。それは現実のものと言うより作られたものである。アヌープ・ナヤックは、「白人らしさや黒人らしさが生じるのは、白人か黒人かということに結び付けられることによるのではなく、むしろ人種の符号が日常的なプラクティスに記号化されることによる」(Nayak, 2006: 418-9)。ニコラ・ロロックは、黒人中産階級が白人社会の中で正統性を得ようとするために実践する「格別な仕事」は、人種の平等を不安定にするものであるという。それは、「より白人らしい」という好ましい人を包摂するということからである。こうした働きや動きは、傷つくことのない白人性の特権を維持するものである(Rollock et al., 2011: 1090)。

向上心のある黒人の若者は、白人中産階級らしさという性質を纏うことで、人種差別を避けることができる——正しい黒人という価値を得る。病理化された黒人らしさ、あるいは、汚れた白人らしさは、中産階級の振る舞いを行うことや、そのことが与える敬意を通じて、「無くす」ことができるとされる。しかし、この変化は、苦心・喪失・従順を要求する。それは、その他の人よりも大変な仕事を求めるということである。

生徒・教師・保護者を学校に引き留めるもの：交渉と妥協

ドリームフィールズ校のテスト結果は、教師・保護者・生徒にとっての強力なモチベーターである。学校に対するアンビバレンスや失望は、テスト結果における成功の保証に取り込まれていく。

ドリームフィールズ校の雇用条件は、あらゆる将来の職場を代表している。教師も生徒も類似した立場にあり、そのことは生徒・教師もわかっている。学校は、生徒を職場に慣れるように訓練する。その職場は、反対したりするのではなく指示に従うことを求める職場であり、成果を挙げなかったり文句を言ったりすることは貧困生活

のリスクを負うことを意味するというものである。雇用における妥協の余地なく細かい要求は、教師によって体现され、子どもたちに影響している。それは、協調し、成果をあげよ。さもなければ辞めろ——というものだ (conform and perform - or leave)。多くの生徒は、このアプローチを受け入れ、それに従っている。

回避することのできない命令として示されているものは、労働世界の実態を表象している。意見を言うことはできず、労働者がいかに成果を出すかにかのみ価値が置かれる。

ここで、「道徳的な含みのある経済的な事物としての『良い人生』」に対して私たちが抱く愛着について論じたロレイン・バーラントの指摘に触れておきたい (Berlant, 2011: 2)。実際のところは自らの発展を阻害するものなのにそれを求めてしまう「残酷な楽観主義」に連なっていく。バーラントは、それが不安定で、壊れやすく、[金銭的には]高くつくものであるにもかかわらず、なぜ人々が「昔からの良い人生という幻想」に愛着を抱くのかと問うている。

イデオロギーの形式としての新自由主義は、それがドミナントな立場を維持するために人々の人生を形成するための働きをもっているとジョディ・ディーンは主張する。「それは、それがただそういうものであるものとして正しいと感じられるように、人々の期待と欲望を形作る必要がある」 (Dean, 2009: 50 引用者による強調)。人々は、自らの立ち位置を明らかに危うくするものに対してより強く惹かれるようになっており、将来における楽しみや満足というものが、新自由主義的なイデオロギーの形式に人々を強くつなぎとめるものとして作用する。

若者の期待と欲望を形成することで、ドリームフィールズ校の規律は当然のものとなっている。13歳のロナは、この学校以外には比較できるものがないとし、「これが私の知る全てです」と述べていた。フローレンスは、規律は最終的には役に立つものだと考えている。「うまくやろうとする人はいますが、その人たちは職場で全体が見えないと思います(…)私たちは規律によって成長しているので、それは良いことだと思います。」

ドリームフィールズ校の実践は、子どもたちを待つ避けがたい「実際の世界」のために彼らを備えさせているというよりは、子どもたちと〔社会の〕秩序を想像し、彼らにその予行演習をさせることを通して、この来るべき世界の制約を生み出す手助けをする。そうすることで、子どもたちが〔その中で〕育ち、それに慣れるようにしているのである。

ⁱ 訳者による解説を参照のこと。

ⁱⁱ Public private finance initiative のこと。公共サービスの提供に際し、政府部門が資金を全額投入して設置するのではなく、民間団体からの資金等を得ながら設置し、その運営も民間団体に委ねる形式。

ⁱⁱⁱ City technology college の略。都市部に作られた技術系学校のこと。中央政府から公費補助が行われ、地方当局から独立運営をすることができる

^{iv} Multi academies trust の略。一つの運営団体が複数 (2 から数十) の学校を運営する形態。チェーンのようなもの。

参考文献

- Adonis, A. (2008) 'Academies and social mobility'. Speech to the National Academies Conference, www.standards.dfes.gov.uk/.../Andrew_Adonis_Speech_feb08.doc. [Accessed: 1 September 2009.]
- Adonis, A. (2012) *Education, Education, Education: Reforming England's Schools*. London: Biteback Publishing.
- Ahmed, S. (2010) *The Promise of Happiness*. Durham, NC: Duke University Press.
- Alexander, C. (2000) *The Asian Gang: Ethnicity, Identity, Masculinity*. Oxford: Berg.
- Archer, L. and Yamashita, H. (2003a). Theorising inner-city masculinities: 'race', class, gender and education. *Gender and Education* 15(2): 115-32.
- Archer, L. and Yamashita, H. (2003b) 'Knowing their limits?' Identities, inequalities and inner-city school leavers' post-16 aspirations. *Journal of Education Policy* 18(1): 53-69.
- Back, L. (2007) *The Art of Listening*. Oxford: Berg.
- Ball, S. (1990) *Education, Inequality and School Reform: Values in Crisis!* London: King's College London.
- Ball, S. (2003) *Class Strategies and the Education Market: The Middle Classes and Social Advantage*. Abingdon: RoutledgeFalmer.
- Ball, S. (2007) *Education Plc: Understanding Private Sector Participation in Public Sector Education*. London: Routledge.
- Bentham, J. (1995), ed. M. Bozovic. *The Panopticon*

- Writings*. London: Verso.
- Berlant, L. (2011) *Cruel Optimism*. Durham, NC: Duke University Press.
- Booth, C. (1969 [1889]), ed. A. Fried and R. M. Elman. *Charles Booth's London*. London: Hutchinson.
- Bourdieu, P. (1992) *The Logic of Practice*. Cambridge: Polity Press.
- Bourdieu, P. (2000) *Pascalian Meditations*. Cambridge: Polity Press.
- Bourdieu, P. (2010 [1984]) *Distinction: A Social Critique of the Judgement of Taste*. London: Routledge.
- Bull, A. and Allen, K. (2018) Introduction: Sociological Interrogations of the Turn to Character, *Sociological Research Online*, 23(2) 392-398.
- Burrows, R. (2012) Living with the h-index? Metric assemblages in the contemporary academy. *Sociological Review* 60(2): 355-72.
- Causa, O. and Johansson, A. (2010) Intergenerational Social Mobility in OECD Countries. *OECD Journal: Economic Studies*. Available at: www.oecd.org/eco/growth/49849281. pdf. [Accessed: 19 September 2013.]
- Department for Children, Schools and Families (2009) What are Academies? London: DFCS. Available at: www.standards.dfes.gov.uk/academies/what_are_academies/?version. [Accessed 30 September 2009.]
- Dean, J. (2009) *Democracy and Other Neoliberal Fantasies: Communicative Capitalism and Left Politics*. Durham, NC: Duke University Press.
- de Certeau, M. (1988) *The Practice of Everyday Life*. Berkeley: University of California Press.
- Dreyfus, H. and Rabinow, P. (1982) *Michel: Beyond Structuralism and Hermeneutics*. Brighton: Harvester.
- Engels, F. (2000 [1892]) *The Condition of the Working Class in England*. London: Swan Sonnenschein.
- Essed, P. and Goldberg, D. (2002) Cloning cultures: the social injustices of sameness. *Ethnic and Racial Studies* 25(6): 1066-82.
- Foucault, M. (1991a [1977]) *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. Harmondsworth: Penguin.
- Foucault, M. (1991b [1978]) Governmentality. In G. Burchell et al. (eds), *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*. Chicago: University of Chicago Press, pp.87-104.
- Gane, N. (2012) The governmentalities of neoliberalism: panopticism, post-panopticism and beyond. *Sociological Review* 60(4): 611-34.
- Gewirtz, S. (2002) *The Managerial School: Post-welfarism and Social Justice in Education*. London: Routledge.
- Gillborn, D. and Youdell, D. (2000) *Rationing Education: Policy, Practice, Reform, and Equity*. Buckingham: Open University Press.
- Gillies, V. (2007) *Marginalised Mothers: Exploring Working Class Experiences of Parenting*. London: Routledge.
- Gilroy, P. (2004) *After Empire: Melancholia or Convivial Culture?* London: Routledge.
- Goldberg, D. (2001) *The Racial State*. Oxford: Blackwell.
- Green, A. (1990) *Education and State Formation: The Rise of Education Systems in England, France and the USA*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Hall, S. (1978) Racism and Reaction. In CRE (Commission for Racial Equality) (ed.), *Five Views of Multi-Racial Britain: Talks on Race Relations Broadcast by BBC TV*. London: CRE, pp. 23-35.
- Harrison, A. (2012) Michael Gove: Academy school critics 'happy with failure'. BBC News [Online] 4 January. Available at: www.bbc.co.uk/news/education-16409940. [Accessed: 21 September 2013.]
- Haylett, C. (2001) Illegitimate subjects? Abject whites, neoliberal modernisation, and middle-class multiculturalism. *Environment and Planning D: Society and Space* 19: 351-70.
- Jacobs, J.M. (1996) *The Edge of Empire: Post-colonialism and the City*. London: Routledge.
- Kahn, J. (2001) *Modernity and Exclusion*. London: Sage.
- Lander, V. (2015) 'Racism, It's Part of My Everyday Life': Black and Minority Ethnic Pupils' Ex-

- periences in a Predominantly White School. In C. Alexander, D. Weekes-Bernard and J. Arday (eds), *The Runnymede School Report: Race, Education and Inequality in Contemporary Britain*. London: Runnymede Trust, pp.32-5.
- Lipman, P. (2011) *The New Political Economy of Urban Education: Neoliberalism, Race, and the Right to the City*. New York: Routledge.
- Massey, D. (2011) Ideology and economics in the present moment. *Soundings* 48(11): 29-39.
- Mayhew, H. (2008 [1861]) *London Labour and the London Poor*. Hertfordshire: Wordsworth Editions.
- McClintock, A. (1995) *Imperial Leather: Race, Gender, and Sexuality in the Colonial Contest*. New York: Routledge.
- Mills, C.W. (2000) *The Sociological Imagination*. Oxford: Oxford University Press.
- Mirza, H.S. (2005) 'The More Things Change the More They Stay the Same': Assessing Black Underachievement 35 Years On. In B. Richardson (ed.), *Telling It Like It Is: How Our Schools Fail Black Children*. London: Bookmark Publications, pp.111-19.
- Mohanty, C. (2003) *Feminism Without Borders: Decolonizing Theory, Practicing Solidarity*. Durham, NC: Duke University Press.
- Nayak, A. (2006) After race: ethnography, race and post-race theory. *Ethnic and Racial Studies* 29(3): 411-30.
- Porter, T. (1995) *Trust in Numbers: The Pursuit of Objectivity in Science and Public Life*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Pratt, M. (1992) *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London and New York: Routledge.
- Puwar, N. (2004) *Space Invaders: Race, Gender and Bodies out of Place*. Oxford: Berg.
- Reay, D. (2006) The zombie stalking English schools: social class and educational inequality. *British Journal of Educational Studies* 54(3): 288-307.
- Reay, D. (2013) Social mobility, a panacea for austere times: tales of emperors, frogs, and tadpoles. *British Journal of Sociology of Education* 34(5-6): 660-77.
- Reay, D., Crozier, G., and James, D. (2011) *White Middle Class Identities and Urban Schooling*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Reay, D. et al. (2007) 'A darker shade of pale?' Whiteness, the middle classes and multi-ethnic inner city schooling. *Sociology* 41(6): 1041-60.
- Rollock, N. et al. (2011) The public identities of the black middle classes: managing race in public spaces. *Sociology* 45(6): 1078-93.
- Shore, C. and Wright, S. (2000) Coercive Accountability: The Rise of Audit Culture in Higher Education. In M. Strathern (ed.), *Audit Cultures: Anthropological Studies in Accountability, Ethics, and the Academy*. London and New York: Routledge, pp.57-89.
- Skeggs, B. (1997) *Formations of Class and Gender: Becoming Respectable*. London: Sage.
- Skeggs, B. (2004) *Class, Self, Culture*. London: Routledge.
- Stoler, A. (1995) *Race and the Education of Desire: Foucault's History of Sexuality and the Colonial Order of Things*. Durham, NC: Duke University Press.
- Stoler, A. (2002) *Carnal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*. Berkeley: University of California Press.
- Turner, V. (1982) *From Ritual to Theatre: The Human Seriousness of Play*. New York: Performing Arts Journal Publications.
- Turner, V. (1988) *The Anthropology of Performance*. New York: PAJ Publications.
- Tyler, I. (2008) Chav mum chav scum. *Feminist Media Studies* 8(1): 17-34.
- Walford, G. (1991) City Technology Colleges: A Private Magnetism? In G. Walford (ed.), *Private Schooling: Tradition, Change and Diversity*. London: Paul Chapman.
- Walkerdine, V. (2003) Reclassifying upward mobility: femininity and the neo-liberal subject. *Gender and Education* (15)3: 237-48.